# 西域發掘の梵語古經典

## ―ベルンレ文庫を回顧して―

泉　芳　璟

## 一

予が大正九年の春、ケンブリッヂにて偶々ヘルンレ教授の遺書を發見して歸朝の途次齎し歸つてから、歳月流るゝが如く、已に二箇年を經過してしまつた。塵事多忙、意の如くならず如何にもしてせめてこの遺書の解題をなりとも草して、學徒の研鑽に資せんとの念願は止む時なけれど、曩に唯僅かに醫書を簡單に解題せしのみにて、日一日責任の感を深くする有樣である仍て今此に忙中の少閑を割いて、西域地方から梵語古經典の發掘された顚末を叙し、一は以て未だ知らざる人のために筌蹄となり（已知の學者にとつては寧ろ蛇足を加ふるを愧づるのである）、一は以てヘルンレ教授遺書解題の一端に擬することゝする。蓋し西域發掘の梵語古典を最初に解讀したのは、誰あらう、ヘルンレ教授其の人であつて、その後西域の呼び聲は世界を震憾し、敦煌文書の品隲は學壇の方向を一變せんとしてゐる。今後の東洋研究に於て、これら西域發掘の古文書を顧みずしては到底その可なるを知らない。或は從來の斷案定說を全然顚覆するやうな結果が其處から生ずるかもわからぬ。

此に渡邊海旭氏の著歐米の佛敎中から一節を引用することを許して貰はう。

支那の譯經史を瞥見すれば五十餘國と云はれた西域卽中央亞細亞の諸古國がどの位佛敎の傳播に重要であつたかゞ多言を費さずに解る。世高でも法護でも懺でも羅什でも佛敎を漢土に傳へた翻經の高僧は何れも西域に重大の關係を有

する人だ。又玄奘の西域記其の他に就て見ても西域諸國佛教隆盛の狀態は高昌でも于闐でも、龜茲でも、到る處金碧煌燿の莊嚴な殿堂、講學修道の大衆が雲集した記事で今に其盛時を偲ばせる。而して此地方は其地理的の關係で他面には支那對諸蕃の政治的位置から晉漢六朝より唐を經て宋元に迨び、支那、印度、西藏、及遠くは波斯亞拉比亞其他の西方諸國との交通の交叉點となり、諸國文化の潮流が湊會する一の溜りとなり宗教文藝の東西より交通する一大驛亭となりて當時最勢力のあつた佛教は勿論、摩尼教景教等も茲に來り、猶太教さへ此に交りて一種複雜の文化を形づくり、其の言語も梵語、支那語、西藏語、突厥諸國語、波斯語の外に固有の西域諸邦の言語を加へ、民族も隨て此等諸國の人民を網羅し、極めて異彩を放つた賑かな奇觀が印度支那の各驛に出來た（中略）

此の佛教極盛の地、一時異彩ある文化を形づくつた、西域諸國は、回教の侵入から人爲的の破壞を受くると共に天變地異の不幸な慘害のために河流や土地の狀勢が全く變化して、到底繁華な都や賑かな市街驛亭を見ることが不可能になつた。古昔の壯麗な大寺院佛塔は悉く沙土の中に埋沒し其の殷盛な王國は一望漠々人烟絕えたる大沙漠の中に僅に殘壘廢趾古昔の榮華を語るのみである。西域は實に東洋のポンペイだ。（中略）

然し學術の進歩は到底永く荒殘廢滅に委して置かぬ。于闐の發掘が始まりて、牛頭山の精舍や其華麗な舊麗が沙土の中から現はれる。高昌の調査が開始されて其雄麗な壁畫や稀有の遺書がどし〳〵歐洲の博物館に別樣の光彩を發揚する。燉煌では石室の中から思ひ設けぬ千年の古書が萬を數へて出て來るといふ風で、其の發

見された古經、逸書、壁畫、刻文、寶器、佛像等は悉く豐富な新學術の資料となり、伯林にも巴里にも倫敦にも彼得堡にも各方面の學者が競ふて此新資料の研究に努力することゝなり、茲に西域古學或は東方土耳其斯旦古學 Ost-tuskestanische Altertumskunde が成立した。

## 二

此の西域研究に忘るべからざる先輩にして大立物たるヘルンレ教授は晩年、畢生の力を斯學のために傾注したのである。彼は一八四一年十月十九日印度アグラに生れた。一八四八年早くも故國獨逸のヴュルテンブルヒに送られて教育せられた。バスレの大學に入つたのが一八五八年であつた。一八六〇年ロンドンに移り、ゴールドスチュッカーの下に梵語を學んだ。一八六五年ミラトに牧師となり、一八七〇年ベナレスのジェーナーラーヤン大學に教授となり、一八七七年カルカッタのキャシードラル、ミッション大學に學長たり、一八八一年同マドラサ大學に學長たり。一八九九年引退して英國オックスフォードに餘生を送つたのであるが、一九一八年十一月十二日の拂曉に七十八歳の高齢を以て歿した。

彼が心血を傾けたバウエル古文書、索引を加へて三卷の大著は一八九一年の夏着手し一九一二年の四月に逮んで漸く完成したと序言に述べて居る。其の間星霜正に二十一年である。二十一年といへば產れた孤兒が徵兵適齡の一人前の男になるだけの年限である。其の長い年月を孜孜として古文書の研究に從事したことが、それだけで十分驚嘆に値する。況んやその文書は未だ曾て世界に知られざる書體であり、且つその內容は全歐の學者が、未だ一指を染めしことな

き印度の醫方藥物に關するものが多かつたので彼は新にこの方面の研究に着手せざるを得ざることゝなり、この研究に關しても深奥なる造詣に於て殆んど第一人者たる資格を贏ち得たに於てをやである。彼の遺書に醫方藥物に關するもの七十餘部を算するはこの爲めである。何にもせよ、その不撓不屈の精勵は惰夫をして慚死せしめずんば止まぬのである。

又一方其の間に英のオーレルスタイン氏の一九〇六年より八年に亙る大規模の發掘の結果、幾多の梵語、西藏語、于闐、庫車、の言語で書かれた古經典の整理を委托せられ、夫々多數の專門學者と共に協力して、その解讀をなし、西域古經斷片第一卷を出して世に問ふて居る。その第二卷は予の在英中インディアオフィスのトーマス氏の許に原稿も整理せられて近く出版せらるゝと聞いたことであるが、周到緻密な研究振りは是れ亦實に勢力の絶倫なるを雄辯に物語つてゐる。

予は大正五六年の頃、學窓にありて此の古經斷片の大著を讀み、西域の研究の如何に興味多きかに憧憬の念禁しあへず、如何にもしてヘルンレに面接してその高風に浴せんと心竊かに期してゐた。幸に大正七年八月航西の途に上るに及び多少の計畫もしてゐたのであつたが、予が南印度マイソールに滯在してゐた時、この西域研究の巨匠ヘルンレはオックスフォードの寓に永眠したのである。予は翌年カルカッタに遷るに及び、彼が訃を耳にして全く失望したのであつた。死生もとより命にあり、人力の如何ともすべからざる所とは云ひながら、極めて僅かの差で相會するの機が永遠に失はれたのは如何にも遺憾であつた。而してその年十月予は英國に至り、翌年はオックスフォードをも訪ひ、晩年

の彼が居常などを忍び、懐舊の情に堪へなかつた次第であるが、越えて三月偶々ケンブリッヂを訪ふたところ、書肆ヘッファーの店舗に彼の遺書七百冊あまりを發見した予は驚喜惜くところを知らぬ有樣で直ちに買入れ方の交渉に着手したことであつた。幸に事順序よく運んで、先づせめて彼が書齋の一部分を日本へ持ち歸り得たことを以て幾分渴望を癒したのである。

## 三

さて話は西域發掘の事件に移る。この發掘の仰も最初は一八九〇年英國の（當時中尉であつた）バワー（H. Bower）が印度政府の機密の用件を帶んでクチャル（Kuchar）地方へ旅行したが其處で樺皮の經典の斷片を得たといふのである。クチャルは北緯四一度四二分五〇東經八〇度三三分五〇の位置にあり、昔時龜茲の名を以て知られ、東方土耳其のオーシスの一である。バワーはその樺皮經典を印度へ持ち歸り、一八九〇年九月（當時大佐であつた）ウォーターハウス（J. Waterhouse）に送つた。その時添えられた書翰は次の如きものであつた。卷頭に掲げた自筆の書翰はこれである。

私は東方土耳其で二枚の板に包まれた樺皮の寫經を見つけました。若し貴下が誰か解讀の出來る方を知らせて下さるならば有難うございます。其の節は私がその品を御送り申します。

文字は梵語のやうであります。然しパーリ語でなければ私には何であるかわかりませぬ。西藏語ではありませぬ。

私の發見した場所はクチャルに近い埋沒した市街です。

この書面に「埋沒した市街」で發見したと見えてゐるが、實は埋沒市街の近傍の或る塔の底部

で掘り出したのである。そのことは次の手記で見ても明かである。この手記はウオターハウス大佐の許へ九月三十日附小包郵便で現品を送るに際して附加したものである。書面も添えられてある。このことは後に誤解があつてヘルンレも種々辯を費してゐる。

この書翰や其他數通の彼れの自筆書翰はみなヘルンレの遺書の各處から發見された。而して整理して大谷大學に保存してある。

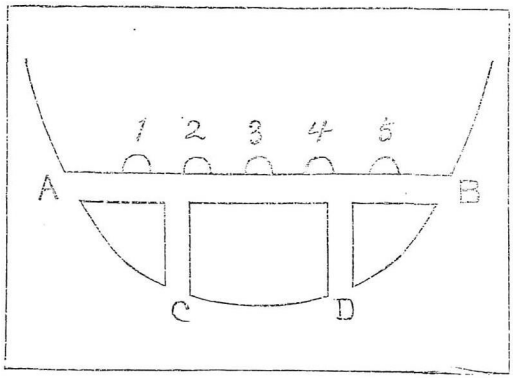
次に一八九〇年九月三十日附シムラでの手記には次の如きものがある。これも大谷大學に保存してある。

私がクチャルにゐた時、一人の男が私を埋沒した地下の市街へつれて行くと云ふ。然しヨーロッパ人を連れて行つたと云ふことが知れると支那人との間に苦情が持ち上ると困るから、夜中に行かうと云ふのであつた。私は承知して眞夜中に出立した。其の男は樺皮の古經の一束を私にくれた。それは奇妙な古い小丘の底部を掘つて獲たのである。そんな小丘はクチャルの諸處に存在するのである。カーシュガールに於ける河の北岸にも一つある。この經典を得たのは埋沒市街の一寸外側になつてゐる。

これら小丘は一般にざつと五十尺か六十尺の高さで濶さこれに比例し、……堅固で……主に天日で乾燥した煉瓦で出來てゐるが、梁の層の如きは次第に壞れかゝつてゐる。この天候に曝された狀態から推察し、且つ土耳其斯坦には雨や雪が全然無いことを考へればこれは非常に古代のものでなければならぬ。

私を案内人が連れて行つたミンゴイの埋沒して居る廢墟と云ふのはシャーヤル河の岸にあつて、クチャルから十六哩ばかりの地點にある。而してアフラシアブの都城の廢趾だと稱せられ

て居る。都城は隨分廣いものであつたに相違ない。然し河の汎濫などのために隨分狹められてゐる。左岸の絶壁の上に中空高く殘つた家の絶壁に懸つてゐるのが見える




私の入つた家の一つは圖に示す如き形であつたA—B、は六ヤードに四ヤードの墜道で、舌狀の丘を貫いてゐる。CDは入口で、丘はABの點に於て殆んど垂直である。

1 2 3 4 5はざつと六尺に六尺の小房である。壁は漆喰で出來て居り、規則正しく見えて居る。

尙ほ他に同じやうな廢趾がこの地方にあると云ふことである。ヤクブベクの時に澤山の黃金が堀り出された……

ウォターハウス大佐はベンゴール亞細亞學會の會長であつたので、一八九〇年十一月五日の例會にこの事を報告し、この書翰を朗讀して發見の顚末を說明した。其後この古寫經を解讀する企てがなされたが不成功に了つた。當時ヘルンレは休暇のために歐洲にあり、彼がこの事をアデンで手にしたボンベイガゼットで知つたのは印度への歸途の船中であつた。恰もバワーの友人カンバーランド（W. B. Cumberland）が同船してゐたので、多少その消息を詳かにすることが出來たが、カルカッタへ着するや、一八九一年二月、ベンゴール亞細亞學會の言語學部の幹事であつた彼は會長にこの寫經を閲覽せんこ

とを請ひ、ウオーターハウスは直ちに彼へ回附した。これ抑もバワー古寫經が學者の解讀を經て世に紹介せらるゝに至つた始である。而してこれがバワー寫經と呼ばるゝものである。

## 四

次にウエーバー寫經のことに移る。一八九二年六月二十一日ラダックのレーに駐在してゐるモラヴィアン傳道會のウエーバー（Rev. F. Weber）より次の書翰が來た。この自筆の書翰も大谷大學に保存してある。

二年以前に私はこのレーでバワー大尉に會ひました。大尉は私にヤールカンドから遠からざる場所で發見した書物を見せてくれましたことがあります。而して氏はそれを貴下に渡さうとしてゐました。……私はこの書物の年代に就て何物をも知りませぬ。然し非常に古いものだと云ふことだけは知れましたから貴下に送つて御批評を願ふのです。これは昨年ヤールカンド附近のクギアルから遠からぬ所で發見せられたので……その場所に近く餘程古くから荒廢してゐる「家」があります。或る商人が寶物を堀り出すつもりで骨を折つてそれを堀りましたが、單に牛の死骸などがあつたばかりでした。それは觸つたら直に碎けてしまひました。その傍に發見せられたのが、この書物だと云ふのです。

この書翰の中に「家」と云ふのは塔のことである。この發見の顚末は寫經と共にウルドウ語で書いた手紙があつてそれをウエーバーは寫經を持つて來た男に讀ませたのである。そのことは七月二十九日附の他の書翰に見えてゐる。この寫經がウエーバー寫經と呼ばれるのである。而してこれは全くバワー寫經と出所が一つであると云ふことが判明した。

次にマカルトネー寫經のことに移る。一八九六年十月十二日附カシュガールの領事マカルトネーはカシュミールの英國駐在官タルボットに宛て、次の書翰を寫經と共に送つた。

これはヤールカンドに住むアフガンの商人ディルダールカーンから贈つて來た古寫經です。バワー寫經がクチャールで發見された時に、二つの他の寫經が同時に同じ事情の下に發見されたものと見えます。而してディルダルカーンは一八九一年にレーへ持つて行きました。彼はその一部分をムンシ、アーマツド、ディンに與へ彼はそれをウェーバーの許へ持つて行つた。これがウェーバー寫經です。他の部分は印度へ持つて行かれて、ある友人の許に置いたのであるが、又一八九五年に再び土耳其斯坦へ持ち歸つて私に贈つたものです。

## 五

これらを綜合すると先づ一八九〇年の二月にクチャルの二人の土耳其人が寶を探すためにクムトゥラーの石窟に近い塔を堀つた。寶は何も別になかつたが、その塔の中から樺皮の寫經を發見した。それを一八九〇年三月の二三日ごろ二人の内一人がバワー中尉に賣渡した。これがバワー寫經である。

この多少の結果がクチャルの土人たちを使嗾して近傍の更に大きいクトルクウルダーの塔を掘つたら一層貴重な獲物があらうと思はせた。

この計畫は終に一八九一年の初に行はれた。然しその塔の中には別に何物もなく唯牛の死骸(と二匹の孤の死骸)があつた。然し又もや古い書物が籠に一杯あつた。其數二十五冊に上つたと云ふ。これらはクチャルの酋長(カージー)の

許に持つて行かれた。其の家で小兒の玩弄にまかせ多少破損を受け、そのまゝ打ち捨て置かれた。

その間にバワーは印度に歸る途上、その獲物をカーシュガールでマカルトネーやペトロヴスキーに見せ、レーではウエーバーに見せた。これらの人は土人に注意を促して同樣の收獲もがなと探索させたでもあらう。すると酋長の家にある寫經のことがクチャル全體に噂されて來たそこで酋長へ行つてそのことを確めるものもあつた一方にカーディルカーンは寫經が酋長の家へ持ち込まれた二日の後、二束になつたその一部分を持ち出した。それをその兄弟のディルダールカーンに與へた。その男は一八九二年に一束をウェーバーにアーマッドデインの手を經て賣つた。他の一束は印度へ持ち出して賣らうとしたが、思ふやうに行かず、一八九五年再び持歸つてカーシュガールのマカルトネーへ賣つた。これがマカルトネー寫經である。

同樣にロシアの御用商人の一人は酋長の家から多少破損した分を得てこれをペトロヴスキーに賣渡した。これがペトロヴスキー寫經と呼ばるゝものである。殘つた部分が如何なつたか。クチャルの地方での噂では酋長の家で次第〳〵になくなつてしまつたといふのである。その幾分は後に歐人の手に渡つたものもある。一八九五年ゴットフレー大尉の手に渡つたものゝ如きはそれである。これはゴットフレー寫經の名によつて呼ばれて居る。

## 六

以上が西域地方のクチャルから古寫經の始めて發見せられた顚末であるが、これが動機となつて世界各國が中央亞細亞に眼を注ぐやうにな

つて來た。西域と云ひ中央亞細亞と云へば甚だ不確定な語ではあるが、實際このクチャルやコータン地方を呼ぶ名稱は現今まで全く確定しては居ないのだ。西域とは玄奘の當時は勿論、支那で古くから用ひた名稱だが、支那にとつては西の方だから西域でも可いが、歐洲諸國からはその反對だから、東方土耳其の名が用ひられてゐる。同時にまた中央亞細亞とも呼ばれてゐる。スタインは此のごろその探險の結果を纏めた大著にセリンディアの名を用ひてゐるセルとはラテンのセレース卽ち絹布若くは支那を意味し、隨てセリンディアとは支那に屬する印度と云ふ意味である。又燉煌といふ名稱が汎くこれらを指してゐることもある。これは餘談であるが、要するにバワーの寫經を先驅として何がな此の地方を漁つたなら獲物があるに違ひないといふ見當をつけて、種々の方面から手が着けられたその第一に數ふべきはロシアのペトロヴスキーで一八九二年から一八九三年に亙つて搜索をなし、その蒐集品は靈都の帝國圖書館に收められてゐる。この後數年の後一九〇〇年から一九〇一年に亙るオーレルスタインの大規摸の探險は世界の學界を驚かした。これは古代于闐考の大著にその光輝を放つてゐる。次で一九〇二年から一九〇三年に亙つて獨のグリユンウエーデル同年の大谷光瑞伯、一九〇四年から一九〇七年に亙るルコック、一九〇五年から一九〇七年に亙るグリュンウエーデルの再探險、次に更に一九〇六年より一九〇八年に亙るスタインの再探險、これらによつて燉煌の呼び聲は東西の學界を風靡するの勢となつたのである。其後日を閱するに隨ひ、これら探險の結果は漸次に世に紹介されて來た。前叙のセリンディアの他、獨逸では古代龜茲(アルトクチヤ)考が出版された。高昌の壁畫を

巧に分割してそのまゝ伯林に持ち歸つた手際は驚くべきものである。

さて今はこれらの寫經の內容が何であるかを叙べてこの稿を終らうと思ふ。

バワー寫經は前にも叙べた通りヘルンレ教授の心血を傾注した大著バウエル寫經三卷の中に委しい。卽ち精巧な玻璃版を以て殆んど現物と異らぬ程度に經典を摸寫しこれをデーヴナーガリー字に寫し代えて對照に便ならしめ、本文中には更にローマ字音譯と翻譯を添えて殆んど間然する所がない。殊に序言は殆んど百頁に亙り委しく發見の顚末を說き、異點を考證し、地圖寫眞を添えて居る。實に二十一年の苦心に値するものである。

バワー寫經は全部七編に分れ、第一より第三までは藥物に關する經典である。第四第五は占法に關するもの、第六第七は咒法に關するものである。第七の中に孔雀王經が含まれてある。これらの經典は多くは支那譯にまだ見當らない今後の學者の研究に待つべきものである。

ウエーバー、マカルトネー寫經も若し天ヘルンレに壽を籍さば整理する意向であつたに違ひない。立派に寫眞は撮られてある。解說も大略は時々のベンゴール亞細亞學會等の雜誌に發表されて居り、それを一纏めにして自分の坐右に置くために一冊としたものがある。これらの材料によつて研究の步武を進めて行つたなら如何なる學界を驚倒すべき結果を見出すかもわからない。偏にこの方面に學徒の奮起を希望するのである。（一一、一〇、五）